# 袋中の本箱

渡辺匡一

## はじめに

袋中上人（良定）は、戦国時代から江戸時代初期にかけて活躍した、浄土宗名越派の学侶である。その存在は、はやく横山重の目にとまり、『琉球神道記』（角川書店1936）の出版によって、『琉球神道記』、『琉球往来』、『神道集略抄』、『南北二京霊地集』、『寤寐集』、『袋中上人絵詞伝』の翻刻と、著述目録・解題が提供された。解題を見れば一目瞭然、袋中の著作は膨大な数にのぼる。中世末期の学問、知のあり方を窺うに格好の対象となるはずなのだが、『琉球神道記』以外の著作には、ほとんど注目が集っていないのが現況である。横山重以後、著作の活字化がまったく図られてこなかったこと、中世における浄土教学、とりわけ「名越派」の教学研究が進展していないことなど、いくつかの要因が挙げられるとは思うが、こんな魅力に溢れた学侶、著作群をほうっておいてよいはずがない。そこで、本稿では、袋中という大海に、蛮勇をふるって船を出すために、袋中の著作活動の大まかな航海図（道筋）を作ってみようと思う。

## 一、袋中略年譜

まずは袋中の生涯を簡単に振り返っておこう。袋中の著作、典籍の収集活動を念頭に置きながら、三期（磐城時代、琉球時代、京都・奈良時代）に分けてみていくことにする。年表も付しておくので併せて見てもらいたい。[1]

袋中は、天文二十一年（一五五二）に、陸奥国磐城（現福島県いわき市）に生まれた。諱を良定、蓮社号は弁蓮社という。[2] 叔父である良要（存洞、天蓮社）を師として出家し、名越派の本山専称寺（いわき市平山崎梅福）や如来寺（いわき市平山崎矢ノ目）などで修行する。[3] さらに円通寺（栃木県益子市）、足利学校、増上寺などで学問修養に励んだ後帰郷、折木成徳寺（いわき市広野町）十三世となる。天正八年（一五八〇）、袋中二十九歳の時で

ある。成徳寺は名越派四檀林の一寺であり、袋中の学侶としての能力が評価されての抜擢だったと思われる。

袋中の前には、常に有力な援助者が現れる。磐城時代の袋中を支えたのは戦国大名岩城氏だった。岩城定隆の帰依を受けた袋中は、慶長四年（一五九九）四十九歳の時に平城（たいら）下に菩提院を開山し、拠点を平へと移すことになる。如来寺に収められていた名越派の秘書、月形箱（つきがたのはこ）について記すのも（『月形箱事』）この頃である。

順風満帆であったはずの袋中の人生が大きく変化するのは、慶長八年のことである。五十二歳にして、突如渡明を企てるものの失敗、琉球王国に三年の間滞在することになる。なぜ袋中は中国へ渡ろうとしたのか。『袋中上人絵詞伝』（袋中庵）は「入唐求法の望み」によるとするが、はっきりしたことはわからない。ただし、袋中が渡明を企てる前年、慶長七年に、幕府の命により岩城氏は改易の憂き目にあっている。最大の庇護者を失ったことが袋中渡明の一因であったことも充分考えられる。[4] 磐城時代の袋中の著作は、諸書の抜書である『枕中書』、『梵漢対映集』など、現在確認できる限り十四点であり、全著作の一割程度にとどまる。

はからずも滞在することになった琉球王国で、袋中は再び強力な援助者を得る。時の琉球国王尚寧である。尚寧が袋中の熱烈な信奉者であったことは、檀王法林寺（京都市左京区。以下法林寺と記す）や、いわき市内に残される尚寧からの贈品によって窺い知ることができる。[5] 袋中帰朝後、袋中を慕って琉球から渡ってきた寿安のような僧もいた。琉球王国滞在中に、袋中は、書簡等を収めた往来物『琉球往来』と、琉球の神キンマモンなど、琉球での様々な体験を書き留めた『琉球神道記』を書き記している。

慶長十一年（一六〇六）、帰朝した袋中は、筑紫善導寺に赴き浄土宗鎮西琉の祖弁長の尊像を拝んだりしながら上洛、山崎大念寺に居を定める。ここで三人目の援助者、松平隠岐守定勝が現れる。定勝の庇護のもと、袋中は慶長十六年、洛中三条の地にあった法林寺を再興する。この時期から袋中の著作、典籍の収集活動は活発化する。元和八年（一六二二）に念仏寺（奈良市漢国町）、寛永元年（一六二四）に心光庵（京都府相楽郡賀茂町）を開山し

| | 年次 | 年齢 | 事項 |
|---|---|---|---|
| 磐城 | 天文21年（1552） | 1 | 磐城菊田郡岩岡に生まれる。父は賀茂氏、母は八幡氏。 |
| | 永禄8年（1565） | 14 | 能満寺において叔父存洞を師とし剃髪。 |
| | 天正8年（1580） | 29 | 専称寺・如来寺・円通寺・増上寺・足利学校等で修行。 |
| | 慶長4年（1599） | 49 | 帰郷。楢葉成徳寺十三世となる。 |
| | 7年（1602） | 51 | 磐城平城主岩城貞隆の帰依を受け、平菩提院を開山。 |
| | | | 岩城氏、領地召し上げ。 |
| 琉球 | 8年（1603） | 52 | 渡明を企てるも果たせず、琉球国の地を踏む。 |
| | | | 尚寧王の帰依を受け、桂林寺に住す（『琉球神道記』）。 |
| 奈良・京都 | 11年（1606） | 55 | 帰洛。大念寺・西遊寺（現京都）などに住す。 |
| | 16年（1611） | 60 | 松平隠岐守（定勝）、袋中と師檀の契りを結ぶ。 |
| | 元和5年（1619） | 68 | 法林寺（京都市左京区）を中興。 |
| | 8年（1622） | 71 | 袋中庵（京都市左京区）を建立。 |
| | 寛永1年（1624） | 73 | 念仏寺（奈良市漢国町）を建立。 |
| | | | 心光庵（京都府相楽郡賀茂町）を建立。 |
| | 2年（1625） | 74 | 『私集書目録』（増福寺蔵）を著す。 |
| | 3年（1626） | 75 | 『私集書目録』（法林寺蔵）を著す。 |
| | 5年（1628） | 77 | 『月形総目録』（法林寺蔵）を著す。 |
| | 6年（1629） | 78 | 知恩院主霊岩和尚に名越派相承の義を説き賞美される。 |
| | 11年（1634） | 83 | 浄瑠璃寺蔵大蔵経を補完し、念仏寺に経蔵を建てる。 |
| | 14年（1637） | 86 | 『平函』を制作する。 |
| | 16年（1639） | 88 | 『南都降魔山善光院聖教什物目録』を著す。 |
| | | | 一月二十一日没。 |

つつ、かつて学問修養に励んだ下野国大沢円通寺に自著を奉納したり（寛永元年）[6]、如来寺に良山筆『可分述伝集』を進奉したりしている（同年）。浄土宗名越派の学侶として自信にみなぎった袋中の姿が見えるようである。寛永三年に月形箱を制作し法林寺に納めた袋中は、同五年、知恩院主持霊巌和尚の要請により名越派相承の義を説き賞美されたとされる（『袋中上人絵詞伝』）。晩年の袋中は念仏寺と心光庵の間を往き来しながら著作や典籍収集（浄瑠璃寺蔵大蔵経の補完など）に励み、寛永十六年（一六三九）一月二十一日、八十八歳の生涯を閉じる。袋中の長い生涯を振り返ってみると、著作活動には大きな波があることがわかる。実は、袋中の著作の大半は、京都・奈良時代、法林寺を再興した六十歳前後からの二十数年間になされたものなのである。

## 二、袋中の著作物

それでは、袋中の著作がどのぐらいあるのか、『琉球神道記』の解題（以下「解題」と略す）をもとに、編年の体裁にまとめ直してみたのが以下の表である。著作数は切紙まで含めて百二十四点を数える。[7]

| | 書名 | 成立 | 所蔵〔翻刻〕 |
|---|---|---|---|
| 城 1 | 梵漢対映集 | 天正9年（1581） | 大正大学・京都大学など |
| 城 2 | 浄土血脈論 平 | 天正11年（1583） | 大正大学〔続浄全8〕 |
| 城 3 | 芬陀利伽 | 天正11年（1583） | 法林・増福寺（写） |
| 城 4 | 果号仮字註 ★ | 天正11年（1583） | 法林寺・増福寺（写） |
| 城 5 | 鈔記相伝式定端書 ★ | 天正11年（1583） | 法林寺（写） |
| 磐 6 | 麒麟論私釈 | 天正13年（1585） | 大正大学・龍谷大学など |
| 磐 7 | 大原談義聞書鈔端書 平 | 天正13年（1585） | 法林寺（写）、大正大学 |
| 磐 8 | 所作之大事 | 慶長3年（1598） | 如来寺・円通寺・法林寺（写） |
| 磐 9 | 浄土血脈端書 ★ | 慶長6年（1601） | 〔続浄全〕 |
| 磐 10 | 月形箱事 ★ | 慶長6年（1601） | 如来寺・円通寺・法林寺（写） |
| 磐 11 | 枕中書 | 慶長8年（1603）以前 | 法林寺（写） |
| 磐 12 | 啓袋付抄物 平 | 慶長8年（1603）以前 | 〔続浄全〕 |
| 磐 13 | 曼荼羅不審問答鈔 | 慶長8年（1603） | 現存せず |
| 磐 14 | 説法明眼論端書 | 慶長8年（1603）頃 | 西極楽寺（写） |
| 琉球 15 | 琉球神道記 平 | 慶長11年（1606） | 大正大学・早稲田大学など |
| 琉球 16 | 琉球往来 | 慶長11年（1606） | 袋中庵など〔『琉球神道記』〕 |
| 寺 17 | 梵本浄土三部経 | 慶長14年（1609） | 東京大学など〔『琉球神道記』〕 |
| 寺 18 | 梵字三経分別 | 慶長14年（1609） | 法林寺（写） |
| 寺 19 | 臨終要決私記 平 | 慶長14年（1609）～元和7年（1621） | 法林寺（写） |
| 寺 20 | 諸上善人詠略釈 | 慶長15年（1610） | 念仏寺（写）、大正大学 |
| 寺 21 | 梵漢三経 | 慶長16年（1611） | 念仏寺（写） |
| 寺 22 | 浄土三経相伝抄 ★ | 慶長16年（1611） | 円通寺・法林寺（写）、大正大学・龍谷大学 |
| 寺 23 | 流儀相伝次第 ★ | 慶長16年（1611） | 法林寺・増福寺（写） |
| 寺 24 | 念珠 ★ | 慶長16年（1611） | 円通寺・法林寺（写） |
| 寺 25 | 仏判 ★ | 慶長16年（1611） | 円通寺・法林寺（写） |
| 寺 26 | 天竺往生験記端書 | 慶長18年（1613） | 法林寺（写）、大正大学 |
| 寺 27 | 題額聖闏讃 | 慶長18年（1613） | 如来寺・円通寺・法林寺（写）、大正大学など〔仏全〕 |
| 林 28 | 当麻白記 | 慶長19年（1614） | 如来寺・法林寺・円通寺（写）、大正大学など |
| 林 29 | 徹選択相伝 | 慶長年中（1596～1614） | 法林寺（写） |
| 林 30 | 大原 ★ | 慶長年中（1596～1614） | 法林寺・円通寺（写） |
| 林 31 | 評摧邪論 平 | 元和5年（1619） | 法林寺（写）、大谷大学など |
| 林 32 | 開題考文抄上略釈 | 元和6年（1620） | 法林寺（写） |
| 法 33 | 東西問答 | 元和6年（1620）頃 | 大正大学 |
| 法 34 | 五重略釈 ★ | 元和7年（1621）以前 | 法林寺・円通寺（写） |
| 法 35 | 五重略伝 ★ | 元和7年（1621）以前 | 法林寺・円通寺（写）。法林寺本は51～55を付す。 |
| 法 36 | 浄土随自意法門要釈 ★ | 元和7年（1621）以前 | 法林寺・増福寺（写）法林寺本は37・38と合巻 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 37 | 伝来 | ★ | 元和7年(1621) | 以前 | 法林寺・増福寺(写) |
| 38 | 難遂往生機要釈 | ★ | 元和7年(1621) | 以前 | 法林寺・増福寺(写) |
| 39 | 授手印要釈 | ★ | 元和7年(1621) | 以前 | 増福寺(写) 40と合巻 |
| 40 | 領解抄要釈 | ★ | 元和7年(1621) | 以前 | 増福寺(写) |
| 41 | 決答疑問抄要釈 | ★ | 元和7年(1621) | 以前 | 法林寺・増福寺(写) |
| 42 | 釈書少略頌 | 平 | 元和7年(1621) | 以前 | 現存せず |
| 43 | 当麻踏供養図記 | | 元和7年(1621) | | 法林寺(写) |
| 44 | 選択之伝 | | 元和7年(1621) | | 大正大学 |
| 45 | 仏寺 舎利記 | 平 | 元和8年(1622) | | 念仏寺(写)、大正大学 |
| 46 | 善導大師発願文釈文 | | 元和9年(1623) | | 袋中庵(写) |
| 47 | 留箭註 | | 元和10年(1624) | | 法林寺(写) |
| 48 | 三国起請文 | | 元和年中(1614～1623) | | 円通寺(写) |
| 49 | 重書校合私抄 | | 元和年中(1614～1623) | | 円通寺(写) |
| 50 | 浄土随自意語法門 | ★ | 寛永1年(1624) | | 円通寺(写) |
| 51 | 円相事 | ★ | 寛永1年(1624) | 以前 | 法林寺・円通寺(写) |
| 52 | 手印事 | ★ | 寛永1年(1624) | 以前 | 法林寺・円通寺(写) |
| 53 | 名不知吊事 | ★ | 寛永1年(1624) | 以前 | 法林寺・円通寺(写) |
| 54 | 無縫塔 | ★ | 寛永1年(1624) | 以前 | 法林寺・円通寺(写) |
| 55 | 公之字 | ★ | 寛永1年(1624) | 以前 | 法林寺・円通寺(写) |
| 56 | 南北二京霊地集 | 平 | 寛永1年(1624) | | 西寿寺(写)、旧赤木文庫 |
| 57 | 名越派授手印諍 | | 寛永1年(1624) | | 法林寺(写) |
| 58 | 果分述伝集裏書 | | 寛永1年(1624) | | 如来寺(写) |
| 59 | 私集書目録 | | 寛永1年(1624) | | 増福寺(写) |
| 60 | 浄土最初曼荼羅略記 | | 寛永2年(1625) | | 大正大学62と合冊 |
| 61 | 浄土第三曼荼羅略記 | | 寛永2年(1625) | | 大正大学 |
| 62 | 四十二章経 | | 寛永2年(1625) | | 大正大学 |
| 63 | 約衆ノ文 | | 寛永2年(1625) | | 本覚寺(写) |
| 64 | 白記抄鈔 | | 寛永3年(1626) | 以前 | 法林寺(写) |
| 65 | 留箭名字 | | 寛永3年(1626) | | 法林寺(写) |
| 66 | 月形総目録 | | 寛永3年(1626) | | 法林寺(写)〔『琉球神道記』〕 |
| 67 | 授手印先縦 | | 寛永3年(1626) | | 法林寺(写) |
| 68 | 礼賛放光出所事 | | 寛永3年(1626) | | 法林寺(写) |
| 69 | 絡寂集 | | 寛永3年(1626) | 以降 | 法林寺(写)〔『琉球神道記』〕 |
| 70 | 仏本行略経 | | 寛永4年(1627) | | 龍谷大学 |
| 71 | 帰命般舟讃 | | 寛永6年(1629) | 以降 | 法林寺(写) 72・73合冊 |
| 72 | 三昧発得記分別抄 | | 寛永6年(1629) | 以降 | 法林寺(写) |
| 73 | 夢中善導寿 | | 寛永6年(1629) | 以降 | 法林寺(写) |
| 74 | 大雲輪請雨経巻上略抄 | | 寛永7年(1630) | | 法林寺(写) 75と合巻 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 75 | 庵・止悪風法 | | 寛永7年(1630) | | 法林寺(写) |
| 76 | 請雨法 | | 寛永8年(1631) | | 増福寺・法林寺(写) |
| 77 | 五百誓願略経 | | 寛永9年(1632) | | 大正大学 |
| 78 | 五百誓願略経私記 | | 寛永9年(1632) | | 大正大学 |
| 79 | 随問記 | 平 | 寛永9年(1632) | | 大正大学 |
| 80 | 泥洹之道 | 平 | 寛永9年(1634) | 以降 | 大正大学 |
| 81 | 逆修導師相伝 | | 寛永10年(1633) | | 法林寺(写) |
| 82 | 三国伝法 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 83 | 未来記 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 84 | 二十五菩薩 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 85 | 要集 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 86 | 倶舎 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 87 | 法華三大部抜 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 88 | 行事抄 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 89 | 略文類 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 90 | 蒙求 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 91 | 初後曼陀記 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 92 | 三論玄義 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 93 | 云云鈔 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 94 | 雑集 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 95 | 小聞記 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 96 | 釈書抜書 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 97 | 貧道記 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 98 | 睡聞書 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 99 | 用心書 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 100 | 五会讃 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 101 | 千字文 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 102 | 語伝抄 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 103 | 随見集 | 平 | 寛永11年(1634) | 以前 | 現存せず |
| 104 | 光心 私集書目録(増訂) | | 寛永11年(1629) | 以降 | 法林寺(写) |
| 105 | 月形目録 | | 寛永14年(1637) | | 法林寺(写) |
| 106 | 雑物集 | | 寛永15年(1638) | 以降 | 法林寺(写) |
| 107 | 涅槃像考文抄 | | 寛永年中(1624～1639) | | 大正大学 108と合冊 |
| 108 | 涅槃像一座談 | | 寛永年中(1624～1639) | | 大正大学 |
| 109 | 青天集 | 不明 | | | 大谷大学(写) |
| 110 | 弥陀偈私記 | 不明 | | | 龍谷大学 |
| 111 | 真宗要文集 | 不明 | | | 法林寺(写) 112・113と合冊 |
| 112 | 元亨釈書難字所少分抄 | 不明 | | | 法林寺(写) |
| 113 | 四十八巻伝私抄 | 不明 | | | 法林寺(写) |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 114 | 塚焼消口決 | 不明 | 法林寺（写） |
| 115 | 良字口決 | 不明 | 法林寺（写） |
| 116 | 妙果 | 不明 | 法林寺（写） |
| 117 | 安心十念二伝事 | 不明 | 法林寺（写） |
| 118 | 仏覚三色幟伝像追書 | 不明 | 法林寺（写） |
| 119 | 矢目如来寺許可 | 不明 | 法林寺（写） |
| 120 | 方軌 | 不明 | 本覚寺（写） |
| 121 | 略論裏書見聞追加 | 不明 | 法林寺（写） |
| 122 | 名越流五重ノ式定 | 不明 | 円通寺（写） |
| 123 | 手印之註追加 | 不明 | 正定院（写） |
| 124 | 袋中名目 | 不明 | 現存せず（元禄書籍目録） |

※書名は内題で統一した。所蔵の内、（写）を付したものは写本、付していないものは版本を意味する。〔　〕は翻刻所収書。〔続浄全〕は『続浄土宗全書』、〔仏全〕は日本仏教全書を意味する。★は円通寺奉納本。平は平箱の箱蓋裏の目録に挙げられているもの。[8]

著作年代のはっきりしている百八点のうち、五十二歳まで過ごした磐城時代の著作十四点、琉球時代の著作二点に対して、京都・奈良時代には、五十八歳から八十七歳までの間に九十二点もの著作をものしている。それでは、六十歳を境に始まる袋中の旺盛な著作活動について、袋中が作ったいくつかの本箱を中心に迫ってみることにしよう。

## 三、月形箱―袋中の原点―

その前に、袋中の著作活動を考える上で忘れてはならない、名越派の秘書を収めた「月形箱」について触れておくことにしよう。如来寺に伝わるこの箱は、名越派の派祖良弁（尊観）、二祖良慶（妙心）、三祖良山（妙観）の著述を中心に収められ、名越派相伝の秘書として秘蔵されてきた。如来寺の住持以外は見ることができないと言われる「月形箱」を、どういう経緯かはわからないが、袋中は磐城時代に見ており、『月形箱事』（10）という書物をしたためている（慶長六年）。『月形箱事』で袋中は、箱の名が二祖良慶の住していた善光寺月形房に由来することを明らかにし、さらに問答形式で箱にまつわる口伝を披露している。

問フ、世ニ卓相伝ト云ハ如何ン。答フ、当流ニハ箱相伝ノ外、之レ有ルベカラズ。但シ近代ニ此ノ義有リ。他家ノ軌則ニ似ル歟。問フ、箱相承先蹤有リヤ。答フ、大蔵千字箱、師々相承也……。今之ヲ、医王前逝ノ薬庫、地蔵菩薩宝珠、多門宝塔、王家神器、武家重代、田家農器ニ考ヘバ、準ヒ知ルベシ。問フ、此箱ノ定量如何ン。答フ、箱蓋常ノ如シ。山公学所ノ箱ヲ以テ、懸子ト為ス。此秘蔵スルノ義也。銘書寸尺、並書ノ籠ル所、一々口伝在リ。[9]

名越派では箱で相伝すること、箱相承の先蹤、箱は山公（良山）の先例に倣って懸子であり、秘蔵の意を持つこと、書を収める場所にもそれぞれ口伝があることなど、月形箱が名越派にとっていかに特別なものであるかを面々と記している。

名越派の秘書を収める月形箱を相伝することは、学侶である袋中の夢であったに違いない。五十二歳で故郷磐城を後にした袋中は、琉球を経て活動の舞台を京都・奈良へ移し、果たせなかった月形箱の相伝、学侶としての頂点を目指して、著作に勤しむことになる。

## 四、名越派の学侶としての自負
### ―大沢円通寺への自著の奉納―

琉球から帰朝し、京都法林寺を拠点として精力的に行われた袋中の著作活動は、寛永元年（一六二四）、大沢円通寺への自著の奉納によって一つのピークを迎える。[10] 当時、名越派四檀林のなかでもっとも学問が盛んであった、いわば名越教学の総本山へ進奉された書物は、現在確認されているだけで二十三点に及ぶ。（ ）は著作一覧表の番号である。

『芬陀利伽』（3）、『果号仮字註』（5）、『浄土血脈端書』（9）、『月形箱事』（10）、『浄土三経相伝抄』（22）、『流儀相伝次第』（23）、『念珠』（24）、『仏判』（25）、『大原』（30）、『五重略釈』（34）、『五重略伝』（35）、『浄土随自意要釈』（36）、『伝来』（37）、『難遂往生機要釈』（38）、『授手印要釈』（39）、『領解抄要釈』（40）、『決答疑問抄要釈』（41）、『浄土随自意語法門』（50）、『円相事』（51）、『手印事』（52）、『名不知吊事』（53）、『無縫塔』（54）、『公之字』（55）

奉納本はすべて名越派の相伝に関わるものである。特に『浄土随自意要釈』（35）を初めとして、五重相伝に関わるものが多い（34～41、50～55）。もともと浄土宗には特別な伝法の方式がなかったが、白旗派中興の祖、了誉聖冏（一三四一～一四二〇）によって、初重から五重までの五段階に分けて宗の肝要を伝授する「五重相伝」の様式が調えられた。対する名越派も五重相伝の様式をとったが、五重の内容の相違によって白旗派との差別化を図ったとされている。両派ともに開祖法然・二祖弁長・三祖良忠・曇鸞大師の著作の肝要を順々に伝授していくのであるが、両派が初重から五重まで何を伝授するのか、表にしてその違いを確認しておくことにしよう。

| | 初重 | 二重 | 三重 | 四重 | 五重 |
|---|---|---|---|---|---|
| 白旗派 | 『往生記』 | 『授手印』 | 『領解抄』 | 『決答鈔』 | 『論註記』 |
| 名越派 | 『選択集』 | 『授手印』 | 『領解鈔』 | 『決答鈔』 | 『論註記』 |

白旗派が初重で『往生記』の伝授を行うのに対して、名越派では初重に『選択集』の相伝を用いる点が両派の大きな違いということになる。『浄土随自意要釈』には白旗派との伝授の相違が事細かに記されている。名越派が『選択集』を特に重視していたことは、たとえば、三祖良山著『口伝題下』（月形箱）に、師良慶の言葉として、

浄土宗骨ニ入ル様ハ、選択集ノ意ヲ以テス。和尚ノ御釈ヲ意得、和尚ノ御釈ヲ以テ三経一論ヲ意得ベキ故、先ヅ選択集ヲ能々相伝スベキ也。故ニ選択第一篇ヲ指シテ、浄土一宗之義ヲ知ルト云フト云々。[11]

と記されていることからも窺える。ただし、月形箱の秘書や周辺の典籍には『選択集』を特化はするものの、五重の相伝に関する説は見あたらない。それでは一体誰が名越派の五重相伝を調えていったのか、実は、袋中こそがその張本人だったと考えられるのである。[12]

『寤寐集』には、五重相伝の初重、『選択集』の相伝について記した『浄土随自意要釈』を、善導大師から教示されたことが記されている。[13] 善導大師は浄土五祖の三祖であり、法然にも大きな影響を与えた中国の傑僧である。

又、三条ニ在シ時、夢ニ、南向ノ山ノ際ニ町アリ。我東ニ向テ行。北ヲ見レバ、善導、山ノ腹ニ立玉フ。我拝ス。其時御高声ニシテ、選択ノ大事、随自意ノ所ヲ相伝シ奉ル。

（『寤寐集』十四）

善導大師からの教示は、名越派こそが浄土宗の嫡流であり、正しい相伝を伝える者として袋中が選ばれたことを意味する。『袋中上人絵詞伝』にも、別時念仏の結願の際に善導大師が来臨し、袋中の修行が善導の本意に適っていることが明らかにされた話を載せる。[14]

元和三年正月二十六日より、上人三日三夜の別時念仏を勤修したまへり。結願の暁忽ち仏澱の内に雲にのりたる高僧ありけり。雲の色は赤白間雑し、身の高は三尺ばかりに見えたり。東の空に向ひて、口より化仏三体を吐出せり。其二体はちかく一体はやゝとほし。上人つくづくと高僧の容顔をみ給へば正しく宗祖善導大師にてぞありける。抑上人は自利のためにも化他のためにも、唯本願称名の行のみを綽とし給ひければ、大師の本意にもかなひて、橙明のために来現し給へるならんと、いとたふとくぞ覚へ侍る。

名越派の僧侶たちにとって、夢による宗祖や流祖の啓示は特別なものであった（もちろん、夢による啓示が大切であることは、名越派に限ったことではないが）。三祖良山の後、名越派の教義を大成した円通寺の大学侶、良栄は、『十六箇条疑問答見聞』を著す際に、夢に法然上人が現れ、夢の中では良忠上人となっている自分の手をとって教えをたれたと記している（『良天口筆』）。[15]

善導大師によって教示された五重相伝に関わる書物は、名越派内における袋中の評価を不動のものとしたことは想像に難くない。名越派五重相伝の執筆と円通寺への奉納によって、袋中は名実ともに当代名越派随一の学侶として名を馳せることになったのである。[16]

## 五、月形箱の制作

円通寺に自著を奉納した二年後の寛永三年（一六二六）、袋中は満を持して月形箱を制作し、法林寺に納めた。袋中は、派祖たちの秘書とともに自身の著作も月形箱に収めたのである（『月形箱総目録』（法林寺蔵））。

○已下私ニ抄スル書事

選択之伝（此一草案本）　霊地集（上下一帖也下一自筆）

已上ノ二ハ函底（ソコ）也。時隠所也。此内チ伝ハ永ク隠スベシ。

選択集

那羅延神　一服　重書本尊名号　已上函分

已下ハ懸籠（カケゴ）ノ中

三経切紙合十五通（自筆良定）

芬陀梨（蓮社号本末也）　鈔記式定（本末一帖）

雑切紙合七通一結也　已上自筆

巻物四巻　隨自意一　領解一　授手印一　疑決一

私巻物四　隨自意尺　疑決要尺　授手印要尺　決答要尺一巻　領解要尺　二抄一巻　伝来　三抄一巻　五重略尺一巻

此二後二収ベシ今ハ南都ニヲク

礼讃放光出処切紙　留箭名字切紙

授手印先蹤切紙

已上懸籠分三十三巻大小合[17]

自著の内、『選択之伝』と『南北二京霊地集』の二書は、月形箱の秘書たちと同じ箱の底に収められた。『選択之伝』は、名越派の根本であり、五重相伝の要である『選択集』の縁起と難語を註釈したものである。[18] 良山が『選択集』について説いた『口伝題下』や『選択口筆』と同じ箱に収めた上で、さらに「永ク隠スベシ」と特別な扱いを指示している（『南北二京霊地集』については後述）。

また、五重相伝に関する書や切紙は、他の書物とは別に、一括して懸籠の中に収められた。わざわざ「懸籠ノ中」と注記するところに、袋中の五重相伝に対する並々ならぬ思いを知ることができる。その昔、袋中が著した『月形箱事』を思い出してみよう。月形箱は、良山が秘蔵すべき書物を入れた「懸籠」が原点であった。袋中が調えていった五重相伝の諸書は、月形箱の秘書たちの中でも特に秘蔵すべき聖典として、良山の例に倣い「懸籠」の中に収められたのである。法林寺での月形箱の制作は、袋中が齢七十五にして名越派の派祖たちと肩を並べたことを宣言するものであった。その名声は洛中にとどろき、やがて寛永五年（一六二八）、知恩院主持霊巌和尚に招かれ「名越派相承の義」を講義するという名誉に浴することになったのである（『袋中上人絵詞伝』）。

## 六、平箱の制作

翌六年には、かねてからの懸案であった浄瑠璃寺蔵大蔵経を補完して、念仏寺に経蔵を建てるなど、月形箱の制作以降も旺盛な活動を続けてきた袋中は、同十一年、八十三歳の時に「平箱」（念仏寺）を制作する。箱の法量は、縦三〇・二cm×横四五・四cm×高さ二三・〇cm。材質は杉。蓋裏には黒漆地に、目録が朱書きされている。目録のうち上段十五・十六、下段廿七～卅一までは別筆である。[19] また、十三『臨終要決』は念仏寺に現存する。法量縦二六・六cm×横一九・八cm。表紙は栗皮色（後補）。外題「臨終要決並記」（直書）、外題右「右ノ十三」、表紙右上「本記已上廿三丁」、右下「良定之」と記されている。元表紙は外題「臨終要決本末」（直書）、表紙右上「此内合二十三丁」「十三」、右下「袋中之」と記されている。元表紙と初めの三丁は袋中自筆である。『臨終要決』の大きさはちょうど平箱の半分であり、「平箱」に収められた諸書は、「平函」用に改めて書写され直した可能性もある。

平函内目録　右ノ分　　左ノ分

一　三国伝法　　十五　二京霊地

二　未来記　　十六　雑集

三　廿五菩薩此内十二　十七　小聞記
四　血脈論十宗頌　十八　琉球神道記
五　要集此内九ツ　十九　摧邪輪
六　倶舎此内十　廿　大原抄補闕倫議
七　法花三大部抜　廿一　尺書抜書
八　行事抄此内十四　廿二　貧道記
九　略文類　廿三　泥洹之道
十　蒙求此内八　廿四　随問記
十一　舎利記　廿五　睡聞書
十二　初後曼陀記　廿六　用心書
十三　臨終要決同記　（廿七　釈書略解）
十四　啓袋同記　（廿八　五会讃）
（十五　三論玄義）　（廿九　千字文）
（十六　云云抄）　（卅　語伝抄）
（卅一　随見集）

弁蓮社袋中良定（花押）

寛永十一戊四月廿五於瓶原[20]

残念なことに、現在、平箱に収められていたことが確認できるのは、わずかに『臨終要決』のみであり、他蔵の書にしても現存するのは、わずか八点に過ぎない（四、十一、十五、十八～二十、二十三、二十四。いづれも平箱に収められていたとは確定できない）。したがって、断定することは難しいのだが、それでも目録を眺めていると、平箱に収められた諸書は、月形箱などとは随分趣が異なっているように思えてくる。まず、何と言っても名越派の秘書や五重相伝に関わる書物が一切入っていない。つまり、平箱は名越派相伝の箱といった性格のものではない、ということになる。目録に挙げられた多くの本は、『私集書目録』（法林寺蔵）に付記される「諸部ノ抜書大巻十余巻、平箱腰高ノ二箱ニ之ヲ収ム」[21]に該当する、抜書の類と想像される。だとすれば、この箱は、袋中がその長い学究の道のりの中で蓄え、自らの学問の礎としてきた抜書（たとえば、『倶舎論』や『法華三大部』の抜書などは、仏門をくぐった初学者の勉強のあとに見える）と、袋中自身が強い思い入れを持つ書物で構成されていたと考えて良いのではないだろうか。

月形箱にも収められた『南北二京霊地集』（寛永元年）は、奈良・京都の霊場の縁起集であるが、当時奈良念仏寺に住していた袋中の目に映ったのは、すでに荒廃した旧都の寺々であった。「今衰廃シテ纔ニ本堂ノミ残レリ。而ニ慶長年中、自朽壊シテ本トノ芝原ナリ」（大安寺）、「今見ニ、悉ク破滅シテ民居トナル」（向原寺）といった惨状を前に、袋中は、その由来すら忘れ去られようとしている霊地の縁起を諸書にあたり、日本（ヤマト）における仏教流布の足跡をたどることによって、聖地（仏土）の回復をはかるのである。

此三笠山ノ麓ニ移住シテ出入所々、皆旧跡也。昔ノ起ヲ問フニ、知音ニ遇ハズ。後人亦此ノ如クナラン。此ニ因リテ、少々書籍ニ見ル所、之ヲ集メ霊地集ト号ス。

（版本識語）[22]

荒廃し、聖地であることを忘れられている旧都への思いや、縁

起を積み上げていくことにより仏の聖地を復元していく手つきは、あたかも二十年前、蛇神を崇める琉球も仏土に他ならないと思い定め、仏教東漸の歴史や諸寺を書き綴ることにより仏土を顕現させてみせた『琉球神道記』を思い起こさせる。仏に帰依する袋中にとって、『南北二京霊地集』や『琉球神道記』は、数多い著作の中でも忘れられない作品だったのだろう。[23] 月形箱に名越派相伝の秘書が収められたのに対して、平箱には、まさに袋中自身を相伝するための秘書が収められたのである。

## おわりに

本稿では、袋中の六十歳を過ぎてからの著作活動を、月形箱や平箱の制作を中心に粗々見てきたが、個々の問題については、それぞれ詳細な分析が必要であることは言うまでもない。そのためには、袋中の著作の翻刻作業、『袋中全集』の発刊が急務であることも言うまでもない。今回のシンポジウムが袋中研究盛行のきっかけになればと心から願いつつ、このあたりで袋中の著作活動の航海図作りを終えることにしよう。

### 注

（1）年表は『袋中上人絵詞伝』、『名越源流志』、『諸由緒大略』などを参照して作成した。袋中の事績は『袋中上人餘光』（檀王法林寺　一九三八年）などに詳しい。拙稿「真言宗と浄土宗の宗論」（『いわきの歴史』郷土出版社　一九九九年）。

（2）『袋中上人絵詞伝』などによる。磐城側の資料『名越源流志』では、袋中の父を岩城忠治郎隆友の藩老、佐藤修理介定衡とする。京都で制作された『袋中上人絵詞伝』などの袋中伝が、父を賀茂氏、母を八幡氏とする背景には、制作者の意図（京都と関わりのある出自の方が、布教の際、効果的である。あるいは袋中の出自を高め、神話化を図る）を見る必要がある。佐藤孝徳氏のご教示による。

（3）如来寺蔵聖教調査は、一九九九年四月から始まり現在も進行中である。福島県地域文化研究会［佐藤孝徳（いわき市文化財保護審議会委員）、小野一雄（いわき市文化財保護審議会委員）、門屋温（いわき明星大学）、曽根原理（東北大学）、渡辺匡一（信州大学）、斎藤理子（自由の森学園）、鈴木陽（いわき明星大学大学院）、酒井英美（同）、鈴木三恵（東北大学大学院）、目黒将史（立教大学大学院）、島崎綾子（いわき明星大学卒業生）、堀江智人（同）、島崎圭介（同）、袴塚瑞子（同）、藤田琴江（同）、小野若菜（いわき明星大学学生）、上村佳恵子（同）、鈴木悠（同）他が調査を担当している。現在、書誌カードの見直し作業を続けている。また、袋中の師である良要は説草集『三語集』の編者でもある。『三語集』については、拙稿「如来寺松峯文庫蔵『三語集』について―浄土宗名越派の説草集―」（『説話文学研究』37　二〇〇二年八月）を参照。

（4）佐藤孝徳氏のご教示による。想像をたくましくすれば、袋中は、叔父良要が如来寺十三世であるという血筋と、岩城氏

という後ろ盾をもって、名越派本山専称寺や如来寺の住持の席を狙っていたとも考えられる。

(5) 尚寧自画自賛の袋中上人像（法林寺蔵）がもっとも有名である。この画幅は、慶長十六年（一六一一）、尚寧が江戸に上り秀忠に謁見した後、薩摩に滞留中描いたものであり、袋中と尚寧の関係の深さを知ることができる。なお、尚寧が袋中のために建てたとされる桂林寺は、『琉球国由来記』（一七一三年成立）によれば、すでに廃寺となっている。

(6) 円通寺への奉納は、「蓮社号切紙端書」（増幅寺蔵）の書写奥に「寛永九年極月晦」の年月日が見えるので、寛永元年以降も行っていたようである。奉納本の多くは琉球僧寿安によって書写され進奉された。如来寺への『果分述伝集』の奉納も寿安によってなされたと推定される（『琉球神道記』解題）。

(7) 「解題」、『私集書目録』（法林寺蔵）などによる。「解題」で紹介される増福寺（いわき市）蔵本の所在は、現在不明である。ただし、この聖教は、もともと専称寺の蔵書だった可能性が高い。紹介されている袋中関係の書物に、増福寺と関係する文言がまったく見られず、一方で、『請雨法』（76）奥書に「弁良定（花押）／寛永八辛未三月十四日／山崎専称寺猊床下」とあり、この書が専称寺に奉納されたものであることを確認できるからである。増福寺蔵聖教には袋中関係以外の書物も多かっただろうから、他の本を確認しないことには、はっきりしたことは言えないが、もし、専称寺の蔵書であれば、袋中の円通寺奉納本は、たとえば専称寺が全山焼失に遭った（一六六八年）後、本山聖教の再構築のため、円通寺から運び込まれた可能性も考えられる。

(8) 34～42は「私集書目録」（59）に「京都而」とされているため、袋中が念仏寺に移る元和七年以前の成立とした。また、51～55は円通寺に奉納されているため、円通寺に奉納された寛永元年以前の成立とした。さらに82～103は平箱に納められているため、平箱制作の寛永十一年以前の成立とした。

(9) 本文は如来寺蔵袋中自筆本（仮番号ツ—1—1）による。原文は漢文体であるが、私意に読み下した。

(10) 円通寺への奉納より三年前（元和八年）に、袋中はすでに奈良念仏寺へ移住している。

(11) 本文は如来寺蔵本（仮番号ツ—3—1）による。原文は漢文体であるが、私意に読み下した。

(12) 「解題」でも「或は袋中上人の時に始められたのかも知れない」とする。また玉山成元「名越派とその叢書」（『続浄土宗全書』十解説）も可能性を示唆する。

(13) 本文は『琉球神道記』（角川書店）による。袋中の夢の記である『寤寐集』には、浄瑠璃寺の一切経や智光曼陀羅の存在、空海、良忠、良弁（名越派祖）との出会いなどが記されている。

(14) 本文は『琉球神道記』（角川書店）による。

(15) 『続浄土宗全書』十。

(16) 円通寺奉納本の内、『決答疑問抄要釈』の末には、「私集書目録」と題して袋中の著作十三点（『麒麟論私釈』、『大原談

義聞書鈔端書」、「梵漢対映集」、「啓袋付抄物」、「説法明眼論端書」、「琉球神道記」、「天竺往生験記端書」、「題額聖闘讃」、「当麻白記」、「釈書少略頌」、「南北二京霊地集」、「選択之伝」、「鈔記相伝式定端書」）が奉納本とともに一覧として挙げられている。自著の一覧も円通寺に送りつけるあたり、袋中の並々ならぬ自負の程が窺い知れよう。

(17) 本文は「解題」による。

(18) 「選択之伝」は草案となっているが、寛永九年（一六三二）十月二十日に完成をみている（大正大学蔵寛永二十年版奥書）。

(19) 「解題」は書名・年号のみを袋中筆とするが、上段一～十四、下段十五～二十六の書名も袋中筆にみえる。

(20) 本文は「解題」による。（　）は別筆部分。

(21) 本文は「解題」による。「腰高箱」については不明。

(22) 本文は「琉球神道記」（角川書店）による。原文は漢文体であるが、私意に読み下した。

(23) 、「琉球神道記」については、拙稿「蛇神キンマモン―浄土僧袋中が見た琉球の神々―」（『文学』九―三　岩波書店　一九九八年七月）、「日琉往還―為朝話にみる差異化と差別化、同一化の歴史―」（『国文学解釈と教材の研究』46―10　学燈社　二〇〇一年八月）を参照。

追記

如来寺蔵「月形箱事」、「口伝題下」の閲覧には、如来寺住職鈴木和長師、副住職鈴木啓順師に格別のご配慮をいただきました。

また、念仏寺蔵「平箱」、「臨終要決」の閲覧には、念仏寺住職三宅敬誠師に格別のご配慮をいただきました。

紙上をもって、厚く御礼申し上げます。

本稿は、科学研究費補助金「中世浄土宗寺院における学問形成についての基礎的研究」（基盤（C）（2）、課題番号14510466）の研究の成果である。